

万田 31 号の技術資料

・効果を高めるための基本的事項

- 1．生育初期から収穫前まで全期間を通じて定期的に使用する。
(別紙作物毎使用基準どおり)
- 2．使用濃度は 10,000 倍を基本としているが、薄い濃度(20,000 倍程度まで)でも使用回数が多いほど効果は高い。
- 3．養水分が不足すると、万田 31 号の効果も弱くなるので必要量は補給する。
作物の樹勢や状況により追加する。
- 4．肥料成分を含みますが、含有量が少ないため通常の肥培管理は行ってください。

・万田 31 号の使用方法

- 1．葉面散布
動力噴霧器などによる散布
ハウス内ではミスト機による散布
大面積の散布には、ヘリコプターによる濃厚液散布
スプリンクラーを利用した散布
- 2．灌水、灌注(土の中へ強制的に注入する)
- 3．葉面散布と灌水の併用

・万田 31 号の作用特性

- 1．継続して使用することにより、効果が現れ易くなる
窒素質肥料のように、葉面散布後短期間で葉色が濃くなるなどのような即効性ではないが、徐々に効果が発現する。
生育初期より収穫期まで定期的に使用することにより、根(細根)の量が増加し、また、吸水・吸肥能力が強まる(生理活性が高まる)。
光合成能力も高くなり、作物の生育が促進され、増収・品質向上につながる。
使用回数・濃度が基準どおり実施されれば、効果は充分にある。
更に効果を高めるには、濃度を濃くするよりも回数を増やす方が良い。
使用回数については、5～10 日間隔程度の使用頻度であれば、回数が多いほど効果が高くなる。
永年作物の果樹は、成熟期～収穫前まで後半の使用徹底が、果実の成熟を高め、品質と貯蔵性も良くなる。

2. 高濃度での使用による効果

3,000 倍～5,000 倍の高濃度での使用では、次のような効果が認められる。

着花（果）促進

日照不足などによる着花（果）不良を防ぐ為、着花期・生理落果期に 1～2 回使用する。

障害回復

気象災害等や病虫害被害などの回復には、被災直後に 1～2 回使用する。

品質向上

収穫前に 1～2 回の使用により品質向上が望める。

3. 連年使用を続けると効果がより現れ易くなる

永年作物では連年使用を続けることにより、単年度ごとの効果だけではなく植物体の体質が改善され、生育促進・増収・品質向上効果などの他に貯蔵養分の蓄積もできて、隔年結果防止にもつながる。

単年度作物では、連年使用を続けることにより、連作障害も少なく効果の発現が早くなり易い。

4. 万田 31 号をより効果的にするためには、一般管理が基本である

万田 31 号は基本どおり使用しても、播種期が適期を外れたり、異常気象・管理不足（肥培水管理など）では、万田 31 号の好結果は得られない。土作りを始めとして、あらゆる栽培管理・努力が伴ってこそ、万田 31 号の効果はより増大し易い。特に、堆肥などを十分に投入して土作りを行った圃場では、効果が出易い。

5. 効果確認試験を行う場合

万田 31 号には、他の資材にはない広範囲への波及（広がり）があることが認められている（特に葉面散布の場合、5～10m 程度）。

試験をするには、万田区と対照区では 10m 以上間隔を開けて試験区を設ける。